2008年(平成20年)2月16日　土曜日　朝日新聞（夕刊）

長期の発掘 新説生んだ

日本のアンデス考古学調査50年

関 雄二　国立民族学博物館教授

日本人がアンデスで考古学調査を開始してから、今年はちょうど50年にあたる。戦後の海外調査の草分け的存在として、東京大学文化人類学教室が主宰する調査団が、欧米研究者の独壇場であったアンデスの地に足を踏み入れたのは1958年のことであった。

新参者の日本調査団が最初に行ったのは地勢、植生、遺跡などを広範囲に見て回る一般調査であった。世界進出前のトヨタ自動車から寄贈された5台のランドクルーザーを操り、アンデス中を踏査したのである。最初の集中発掘対象に選んだのが、ペルー北東高地に位置するコトシュ遺跡で、60年代は、ここに精力を注ぐことになる。

コトシュ調査の当時、アンデス文明の形成期（前2500～西暦紀元前後）の拠点は、巨大神殿と石彫で有名なチャビン・デ・ワンタル遺跡であり、ここから各地に文化が伝播したという見解が強かった。その一方で、チャビン遺跡はあまりに洗練されていたため、起源は別の場所にあるともいわれ、アマゾン地帯が有力な候補地となっていた。その意味で、アマゾン源流に位置するコトシュ遺跡は格好の検証場であった。実際に、コトシュではチャビン様式の土器を検出したばかりでなく、さらに古い文化を確認し、日本調査団は起源論の最前線に躍り出たのである。

なかでも最大の収穫は、交差した手を象った漆喰レリーフの神殿を発見したことであろう。土器が登場する以前の遺構で、当初、古すぎると疑問視されたが、その後、同種の遺構が各地で発見されるに至り、評価は定着する。ペルーの国立博物館にはコトシュ特別室が設けられ、教科書から専門書までコトシュに言及しないものはない。遺跡に近いワヌコ市には記念碑が建てられ、通りには、調査団を率いた泉靖一・東京大教授（当時）の名が冠せられた。

泉の死や大学紛争による中断を経て、調査が再開されたのは、70年代半ばであった。関心は、起源よりも地域的多様性と社会発展過程へ、また調査拠点もコトシュよりさらに北の高地へと移った。やがて大神殿遺跡クントゥル・ワシを80年代後半より手がけながら、コトシュ以来の成果をまとめ、理論化を図る現在のステージに入る。

こうして到達したのが「神殿更新説」である。従来の文明史観では経済が重視され、余剰生産物の発生が権力や宗教的職能者、あるいは階層の発生の前提にあるとされてきたが、事態は逆であった。アンデスでは神殿建設や更新が先にあり、これが労働統御、食糧増産、社会統合を生み出す、と日本調査団は唱えた。目下、わたしを含む現役の研究者は「神殿更新説」の検証と新たな説明モデルの構築を目指し、調査を続けている。

理論化を可能にしたのは、欧米では希な、長期の集中発掘にもとづく成果の蓄積であり、浅薄な競争を排してきた日本の研究制度であった。また、現地研究者ばかりでなく、遺跡を抱える地域住民との協力関係の構築を怠らなかった点も重要である。もちろん、遺跡の保存をめぐって、住民と現地政府との対立に巻き込まれたことも多々あった。現在、遺跡博物館をたちあげ、地域住民が文化遺産の保存や活用に参加できるプロジェクトを推進している。50年という年月は、研究ばかりか、異文化の中で調査を行う意味を教えてくれた貴重な時間であったといえよう。

第1回調査団＝東京大学アンデス調査団提供

せき・ゆうじ　1956年東京生まれ。東京大助手、天理大助教授を経て、現職。専門はアンデス考古学、文化遺産研究。主な著書に『古代アンデス 権力の考古学』など。

朝日新聞社および国立民族学博物館の許可なく転載することを禁じます。